

[6] 原始仏教聖典中の偈文經典に現れる仏教の修行者

[0] 今までの各節に書いてきたことを簡単にまとめると次のようになる。

- (1) 釈尊も仏弟子たちも「遍歴」という言葉からイメージされるような、ただ一人で行方定めぬ行雲流水のような一処不住の「遍歴」は行っていなかった。
- (2) ジャイナ教聖典によるジャイナ教の修行者は、無所有という世界観・価値観を現実形として表す裸形とただ一人で一処不住の生活をする「遍歴」を行うべきものとされていた。
- (3) ヒンドゥー教系の文献における‘parivrājaka’も、語義通りのただ一人で一処不住の生活をする「遍歴」を行うべきものとされていた。
- (4) しかし少なくとも原始仏教聖典には、ニガンタと呼ばれるジャイナ教の修行者や、パーリ語で‘paribbājaka’と表される‘parivrājaka’が、そのような意味の「遍歴」をもっぱらとしていたようには描かれていない。

そこでジャイナ教聖典やヒンドゥー教系の文献によるそれらの修行者像と、原始仏教聖典が伝えるそれらの修行者像との落差をどのように理解するかが問題となるが、実はその落差は仏教聖典自身の中においても見ることができる。すなわち一般には古い成立と考えられている偈頌によって著された經典に現れる修行者と、今まで主に材料としてきた散文によって著された聖典⁽¹⁾に現れる修行者の間には、明らかに落差が認められるのである。「はじめに」で紹介した多くの学者たちが主張される、最初期には仏教の修行者も、ジャイナ教の修行者やバラモン教の遍歴者と同じような遍歴を行っていたという通説の根拠は、この偈頌で書かれた經典を根拠にされているのであろうから、この問題の結論を得るためには、これを検討しないですますことはできない。そこで本節では、仏教の偈頌經典を材料として「遍歴」を考えてみることにしたい。

その仏教の古い成立とされる偈頌で書かれた經典とは、*Suttanipāta*、*Dhammapada*、*Theragāthā*（以下 *Therag.*）、*Therīgāthā*（以下 *Therīg.*）、や *SN.*の「有偈篇」に含まれる偈頌、それにサンスクリット語で書かれた *Udānavarga* などである。その調査および訳文の紹介に当たっては、岩波文庫に含まれる中村元博士の訳を活用させていただいた。

- (1) ここで「經典」というのは経蔵に含まれた文献をいい、「聖典」というのは経蔵・律蔵の両方を含めたものをいう。

[1] 以下には直接「遍歴」に係わる事項について言及されるもののみを調査する。なおここには *pari-√vraj* 以外の語が用いられているものも、内容が「遍歴」を表すと考えられるような句であれば、資料の中に含めた。

[1-1] おそらく仏教学者たちが最初期の仏教の出家修行者は沙門として、一人で遍歴を行っていたとされる証拠として考えられている文章は次のようなものである。

愛欲の貪り (*kāma-rāga*) を去るために、比丘は気をつけて遍歴すべき (*paribbaje*) である。 *Therag.* v.039、*Therag.* v.1162

飲食物と衣服と寝具を得る人は多くの敵を作る。尊敬のうちにはこの災いと大きな危険があることを知って、無欲で遍歴せよ (*paribbaje*)。 *Therag.* vs.153,154

ただ独りいて満足しているもの、彼を人は比丘と呼ぶ。食べる時も過度に飽食してはならない。比丘は腹を満たすことなく、適量を食べてよく気をつけて遍歴せよ (paribbaje)。サーリプッタ長老の偈 *Therag.* vs.981~998

昔は髪を断ち、ただ一衣を着けて、ただ1つの衣をまとめて放浪し (carim)、……善来具足戒によって出家してから、アングとマガダとヴァッジとカーシとコーサラとを往来して (cinṇā)、50年の間負い目なくラッタピンダ (raṭṭhapiṇḍa) ⁽¹⁾ を食した。もとニガンタ派の修行者 (purāṇanigaṇṭhi) であったというパッター (Bhaddā) 尼の偈 *Therīg.* vs.107~110

私は7年間遊行しました (cāri ahaṃ)。それでも安樂を得られなかったので、繩を手にして林の中に入っていました。その時私は解脱しました。 *Therīg.* v.079~081

私は村から村へ、町から町へめぐり歩こう (ahaṃ vicarissāmi gāmā gāmaṃ)。覚った人を、また真理の優れた所以を礼拝しつつ。 *Suttanipāta* v.192

この世の欲望を断ち切り (kāme pahatvāna)、出家して遍歴し (anāgāro paribbaje)、欲望の生活の尽きた人、彼を私は婆羅門と呼ぶ。この世の愛執を断ち切り (taṇhaṃ pahatvāna)、出家して遍歴し、愛執の生活の尽きた人、彼を私は婆羅門と呼ぶ。 *Suttanipāta* vs.639,640、*Dhammapada* vs.415, 416、*Udānavarga* 第33章 v.035

彼らはこれ (妻や子) をさえも断ち切って遍歴修行する (paribbajanti)。 *Dhammapada* v.346、*Udānavarga* 第2章 v.006

比丘に対してなされる世の人々の尊敬のうちにはこの災いがあることを知って、無欲で気をつけて遍歴せよ (parivrajet)。 *Udānavarga* 第13章 v.016

適当な量 (の食物) を受けよ。常に清く生きるものであれ。その行いが親切で分かち合い、なすところが巧みであれ。そうして喜びに満ち、心を落ち着けて比丘は遍歴せよ (parivrajet)。 *Udānavarga* 第32章 v.006

我身見を捨て、比丘は気をつけながら遍歴すべきである (paribbaje)。 *SN.001-021* (vol. I p.013)、*SN.002-016* (vol. I p.053)

彼らはこれをさえも断ち切って、顧みることなく、欲樂を捨てて遍歴修行する (paribbajanti)。 *SN.003-010* (vol. I p.077)

(修行者たちの) ある者はマガダに、ある者はコーサラに、ある者はヴァッジの地に行った。わなにかからない鹿のように、比丘たちは定住所なくして逍遙する (aniketā viharanti)。 *SN. 009-004* (vol. I p.199)

以上のように、確かに仏教の中でもジャイナ教の修行者やバラモン教の遍歴者が行うような遍歴が勧められ、そしてそれを実修していた仏教の出家修行者がいたことは事実であったようである。

(1) この句が遍歴を表すものであろうことは【4】の [4-1] 参照

[1-2] ただしこれらの偈頌がたとえ成立が古いと考えられるとしても、偈頌で著された經典の伝えるものが、釈尊在世中の最初期の修行者たちのあり方のみを表しているとは断定することはできない。古いといってもそれは聖典の成立の新古であって、それが釈尊在世中の早い時期に成立したということの意味するわけではないからである ⁽¹⁾。このことはその偈頌經典自身の中に、

世間の主・最上の人（ブッダ）が世にましましたときには、諸々の比丘たちの振る舞いは今とは異なっていた。今では（昔とは）異なっているのが認められる。 *Therag.* v.921

というような、すでにこの聖典が釈尊の入滅されて以降に編集されたということ物語る句が存在することから明かである。しかしその内容の一部を紹介しておくことは無駄ではないであろう。これには昔の修行者と今の修行者の違いとして、続けて次のようにいう。

衣を以て寒風を守ること、恥ずべきところを蔽うだけのことはした。適量のものを受用し、縁にしたがって得たもので満足していた。 v.922

ただ生きていくために食べた。 v.923

生命を保つための必需品や、医薬や、その他の必要なものに対して強く欲求することはなかった。ただそれらが煩惱の汚れを滅ぼし尽くすようにと願っていた。 v.924

森の中では樹下で、岩窟や洞窟の中で、遠ざかり離れることに専念していた。 v.924

そのような長老は亡くなってしまった。今やそのような人々はわずかである。 v.928

勝者の教えが減じる。 v.929

彼らは財と妻子を捨てて家を出ていったのに、一椀の食を請うためにさえもなしてはならないことをなすのを習いとしている。 v.934

腹が膨れるほどに食べて、背を下にして臥している。目が覚めると雑談している。師の禁じられたことであるのに。 v.935

職人の技術を習得するが、それが沙門としての目的（*sāmañña*）なのである。 v.936

塗料とか油・水・臥具・食物を在家に贈って、（返礼として）ますます多くを得ようとしている。 v.937

生計を立てるために多くの財を蓄える。 v.941

会議（*parisā*）を開くが、業務を作り出すためであって法のためではない。他人に法を説くが利得のためである。 v.942

剃髪し、重衣を纏っているが、修行に努めないで、利得や供養を得るためにうつつを抜かしている。 v.944

また阿難のものとして、次のような句も残されている。

友が世を去り、師も逝去されてしまった者にとっては、もはや身体に関して心がけることほどの友は存在しない。昔の人々はすでに去り（*ye purāṇā atīte te*）、新しい人々は私となじまない（*navehi na sameti me*）。今日、私は、ただ一人思いにふける。雨のために巣ごもりする鳥のように。 *Therag.* v.1035~1036

この句は『涅槃経』をベースにしたものであって、これも釈尊滅後のことを物語っているわけである。

また

（神の子ジャントゥの言葉）ゴータマの弟子であった昔の比丘たちは、安楽に暮らしていた（*sukhajivino pure āsuṃ bhikkhū gotama-sāvakā*）。求める心無く食を乞い、……（ところが今の比丘たちは）村の中で村長が税を取り立てるように、自らを悪人となして食べては、食べては、横になり、他人の家の富に心を奪われている。サンガに合

掌をなし、私はここに或る人々を (*idh-ekacce*) 敬礼する。SN.002-003-005 (vol. I p.061)、SN.009-013 (vol. I p.204)

という句も存する。

このように偈頌經典の中に記されている内容が釈尊在世中の早い時期の事柄のみを物語るとは考えられないが、仏教の修行者の中にも遍歴を行うものもいたであろうことや、傾向としてはだんだんと安きに流れることになったであろうことは十分に推測されうる⁽²⁾。

(1) このような通説の主唱者は中村元博士であるが、博士は次のようにいわれている。ジャイナ教聖典や原始仏教聖典のうちで、理想の修行者を「バラモン」と呼んでいる部分は、マウリヤ王朝以前に作られたものである。その理由はメガステネースの『インド見聞記』、アショーカ王碑文その他マウリヤ王朝時代の諸碑文によると、サマナとブラーフマナとは、つねに対比的に上げられているから。「中村元選集 [決定版] 第10巻」『思想の自由とジャイナ教』p.350 釈尊または仏をヤッカと呼んでいるガーターはマウリヤ王朝時代までに、遅くともシュンガ王朝以前に成立したものであり、これに反して恐ろしい姿の夜叉の記述はおそらくシュンガ王朝以後になって成立したものであろう。「中村元選集 [決定版] 第10巻」『思想の自由とジャイナ教』p.353

(2) 散文聖典にも次のようなものがある。摩訶迦葉は王舎城竹林栗鼠養餌所におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「諸比丘を教誡し、法話をなせ、私かあるいは汝が教誡し、法話しなければならぬ」と言われた。摩訶迦葉は「今は説くに難しい状態です。彼らは教を素直に受け取らないでしょう」と答えた。釈尊は「昔は阿蘭若住・乞食・糞掃衣・三衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、著名となって衣・鉢・食を得たいと考えている年少比丘がいる」と説かれた。SN. 016-008 (vol. II p.208)

摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために説法・教誡しているから汝がなせ」と言われた。摩訶迦葉は「今諸比丘難可爲説法教誡教授。有諸比丘聞所説法。不忍不喜」と答え、「世尊是法根本。是法之導。法所依憑。善哉世尊。願爲敷演。我聞語已。至心受持」とお願いした。釈尊は汝がために説くとして、「昔は阿練若住・乞食・糞掃衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、財利・衣被・飲食・床臥・湯薬を得たいと考えている年少比丘がいる」と説かれた。『雜阿含』1140 (大正02 p.301上)

摩訶迦葉は舎衛国旧園林毘舍佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために教授している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「是諸比丘。不能受語。難可教授」と答え、「世尊是法根本。是法之導。法所依憑。善哉世尊。願爲敷演。我聞語已。至心受持」とお願いした。釈尊は汝がために説くとして、「昔は阿練若住・乞食・糞掃衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、衣服・湯薬・床敷・敷臥具・四事豐饒を得たいと考えている新学比丘がいる」と話された。『別訳雜阿含』115 (大正02 p.415下)

[2] 以上のように偈頌で著された經典の中には、遍歴修行を行う仏教の修行者がいたことが知られるが、しかしながら同じ古いとされる經典の中には同時に、遍歴修行とは相いれない趣旨の文章も数多く見いだされる。

[2-1] 「遍歴」するという言葉よりも、ぬしろ「住む (*viharati, vasati*)」という言葉の方が絶対的に多い。その住む場所別に資料の一例を挙げておく。

庵 (*kuṭi*) : 私はアンジャンナー林に入り込んで、庵を造って (*kuṭikaṃ katvā*) こもった (*ogayha*)。 *Therag.* v.055 ⁽¹⁾

僧院 (vihāra) : 私は具足戒を受けて、釈尊にお目にかかり、僧院 (vihāra) の中で共に住んだ。尊き師は夜を多くは屋外で過ごされた。時を過ごす仕方をよく知っておられる師は、その時僧院 (vihāra) の中に入られた。ゴータマは重衣を敷いて、臥床を設けさせた。 *Therag.* vs.365 (2)

阿蘭若 (arañña, vana, vanasaṅḍa) : ブッダによって善来比丘で具足戒を受け、そこで私は独りで阿蘭若に住んで (araññasmiṃ viharanto) 、師のことばを実行した。 *Therag.* vs. 625,626 (3)

洞窟 (bila, girikandara, pabbatakandara) : 私はひとりで恐ろしい洞窟 (bila) に住んでいる (viharato) 。 *Therag.* v.189 (4)

村 (gāma) : 私の身体は村に住んでいるが (gāme me vasati kāyo) 、私の心は森 (arañña) に行ってしまった。私は疲れて臥しているけれども、そこへ行こう。 *Therag.* v.014 (5)

このように偈頌による経典においても「住する」とする句はたくさんあるのであるが、このなかで「住する」と訳した ‘viharati’ という言葉には、 ‘divāvihāra’ のように午後の一時的な休憩を表すときにも用いられるので、特に「阿蘭若に住する」は「阿蘭若において禅定する」という意味も強いように思われる。おそらくこの場合には、生活のよりどころは僧院にあったものと思われる (6) 。

- (1) 他に *Therag.* vs.056~060 (ただしこれはそれぞれ別の上座の偈である) など。
- (2) 他に *Therag.* v.385。ただしこれは屋外にいるのは寒いだろう、だから僧院の中に入りなさいという、魔王の言葉である。おそらく僧院の中の屋外で禅定しているといるのであろう。
- (3) 他に、 *Therag.* vs.62,435~6,537,602,625~6,1118~1124,1146~1167、 *Udānavarga* 第 23 章 vs.001~002、 *SN.001-001-009* (vol. I p.004) 、 *SN.001-001-010* (vol. I p.005) 、 *SN.001-004-008* (vol. I p.029) 、 *SN.007-002-008* (vol. I pp.180~1) 、 *SN.009*の一連の経
- (4) 他に *Therag.* vs.540,1091 など。
- (5) 他に、 *Therag.* v.234、 *Dhmp.* vs.098、099 など。「森や林にいて、蚊や虻に刺されながらも、出家した目的を達成した。どうして叢林に住む必要があるか (kiṃ me sandavivihārena) 」というような句もある。 *Therag.* vs.684~688
- (6) 住処の網羅的な調査に早島鏡正『初期仏教と社会生活』(岩波書店 昭和 39 年 6 月) の第 1 編「原始仏教における臥坐所の研究」がある。参照されたい。

[2-2] また次のように遍歴に否定的な句さえ存する。

出家の生活は困難であり、それを楽しむことは難しい。在家の生活も困難であり、家に住むのも難しい。心を同じくしない人々と住むのも難しい。旅に出ていくと苦しみに会う (dukkhānupatit’ addhagū) 。だから旅に出るな (na c’addhagū) 。また苦しみに会うな。 *Dhammapada* v.302

[2-3] また偈頌経典の中には、次のようなサンガの中で生活し、またサンガの中で修行すべきであるとする句も存する。まず偈頌経典に登場する仏教の修行者がサンガの中で生活していたことを物語る句を紹介する。

サンガの所有である衣や飲食物を軽んじてはならない。臥処を探して実行せよ。

Therag. v.228

高い台地の上の木陰でブッダが経行されているのを見て敬礼した。ブッダは比丘サン

ガを見渡して (*bhikkhusaṃghaṃ viloketvā*)、次のようにいわれた。アング国とマガダ国の人々は幸せだ。これらの布施をこのソーパーカ (*Sopāka*) が受けてくれるのだから。ソーパーカよ、今日から以後、会いたいと思う時に私に会いに来なさい。これがあなたの具足戒である。生まれて7歳で私は受戒することができた。 *Therag.* v.480～486

よい友のいる比丘は来世で悲しむことがない。その人がサンガに対して清らかな心を保ち (*saṃgho pāsādo yssa' atthi*) ……人々は彼のことを「賤しくない (*adaḷidda*) 」と呼ぶ。 *Therag.* v.508

僧園の通路の小屋に (*saṃghārāssa koṭṭhake*) 立っていた。そこへ釈尊が来られて、私の手を取って僧園の中につれて行かれた (*saṃghārāmaṃ pavesayi*)。チューラパンタカの偈 *Therag.* v.558～9

もしも楽しく生きようと欲するならば、比丘のつとめを注視して、サンガの所有である衣や飲食物を軽んじてはならない。 *Udānavarga* 第13章 v.011

次はサンガの中で修行すべきであるとする句やサンガの生活を積極的に評価する句である。

新たに出家した新参者は、怠らずに生活しているよい友達と交わるべきである。新たに出家した新参者は、サンガの中に住みながら (*saṃghasmiṃ viharaṃ*) 聡明に戒律 (*vinaya*) を学ぶべきである。 *Therag.* vs.249～250

諸々の仏の現れたまうのは楽しい。正しい教えを説くのは楽しい。サンガが和合しているのは楽しい (*sukhā saṃghassa sāmaggī*)。和合している人々がいそしむのは楽しい (*samaggānaṃ tapo sukho*)。 *Dhammapada* v.194

仏が現れるのは楽しい。正しい教えを説くのは楽しい。サンガが和合しているのは楽しい。和合している人々が修養しているのは楽しい。諸々の聖者に合うのは楽しい。彼らと共に住むのも常に楽しい。愚かな者どもに会わないならば、心は常に楽しいであろう。愚人と共に歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのはつらいことである。心ある人々と住むのは楽しい (*dhirais tu sukhasaṃvāso*)。親族と共に住むように (*jñātīnam iva samgramaḥ*)。 *Udānavarga* 第30章 v.022～026

しかしブッダが、「そなたは風病に悩まされているのに、人の住まない荒れ地である林や叢に住しながら、比丘としてどうやっていこうとするのであるか」という質問に対して、

一致和合している仲間の修行者を見て (*samagge sahite disvā*)、私は森 (*kānana*) の中で住みましょう。 *Therag.* v.353

という比丘があったともしているし、サンガに住するのは次善策であったとするものもある。

孤独で座臥することを習え。煩惱の束縛からの離脱を行え。もしそこに楽しみを見いだせないならば、己を守り、よく気をつけながら、サンガの中に住め (*saṃghe vase*)。 *Therag.* v.142

[2-4] また偈頌經典の中には、優れた友と共に励むべきだという内容の句も多く存する。

怠け者を避けよ。離れて住む尊い人たち、熱心に瞑想に努める人たち、常に精を出して勤める聡明な人たちと共に住むべきである (*sahāvase*)。 *Therag.* v.147,148

悪友どもを避けて、最上の人々と交わるべきである。怠け者と交わっているならば、立派に生きている人でも沈む。怠け者を避けよ。離れて住む尊い人たち、熱心に瞑想に

努める人たちと共に住むべきである。 *Therag.* v.264~6

自らは清きものとなり、互いに思いやりを以て、清らかな人々と共に住むようにせよ (saṃvāsaṃ kappayavho)。 聡明な者どもが共に仲良くして、苦悩を終滅せしめるであろう。 *Suttanipāta* v.283

心ある人と共に住むのは楽しい、親族に出会うように (dhīro ca sukhasaṃvāso nātīnaṃ va samāgamo)。 よく気をつけていて、明らかな智慧があり、学ぶところ多く、忍耐強く、戒めを守る。 そのような立派な聖者・良き人・叡知ある人に親しめよ。 *Dhammapada* vs.207~208

また *Udānavarga* 第25章は「友」と称する章である (mitravarga) であって、この中には次のような句が含まれている。

この世では自分よりも優れた人と付き合い。 v.005

最上の優れた人々に近づき仕える人は常に優れた境地に達する。 v.006

立派な人々と交わるならば、善いことが現れる。 v.008

悪人と交わるな、善人と交われ。 v.012

思慮ある人々と共に住むのは楽しい。 親族と出会うようなものである。 v.024

敏捷な人と交われよ。 v.025

[2-5] また偈頌經典の中で一人で遍歴すべきであるというのは、外形的な生活様式ではなく、内面的・倫理的な要請であるという面も存する。 それは *Suttanipāta* に収められている「犀の角のようにただ一人歩め」という一連の句に典型的に現れている。そこには

仲間の中におれば、休むにも、立つにも、行くにも、旅するにも、常に人に呼びかけられる。他人に従属しない独立自由をめざして、犀の角のようにただ一人歩め。 v.040

仲間の中におれば、遊戯と歓楽がある。 また子らに対する情愛ははなはだ大である。愛するものと別れることを厭いながらも、犀の角のようにただ一人歩め。 v.041

といいつつも、同時に

もしも汝が賢明で共同し行儀ただしい明敏な同伴者を得たならば、あらゆる危難に打ち勝ち、こころ喜び、気を落ち着かせて、彼とともに歩め。 v.045

我らは実に朋友を得る幸せを誉め称える。自分よりもすぐれあるいは等しい朋友には親しみ近づくべきである。このような朋友を得ることができなければ、罪過のない生活を楽しんで、犀の角のようにただ一人歩め。 v.047

というから、これら一連の偈頌が精神的な心構えとして、ただ一人歩むことを要請していることがわかる。

[3] 以上、*Suttanipāta* や *Dhammapada*, *Therag.*, *Therīg.*, *SN.* の「有偈篇」に含まれる偈頌、*Udānavarga* などの偈頌經典をもとに仏教の修行者の遍歴について調査してきた。ここには確かにこれ以前の節において用いた、律蔵や散文の経蔵に描かれていた修行者像と確かに異なる部分があることは事実である。 ジャイナ教やバラモン教の遍歴を調査した時にも宿題として残しておいた同様の落差も含めて、偈頌經典と散文聖典の間に存する齟齬について考えてみよう。

[3-1] まず、仏教の偈頌經典を調査したその結果として、2つのことがいえるであろう。

第1には、偈頌經典には散文聖典とは異なって、仏教にもただ一人で行方定めぬ遍歴を行っていた修行者が存在していたことが確認され、またそれを讃えるような文章も存在するということである。しかしそれをもとに釈尊在世中の最初期にあっては、それが仏教の修行者の常態であったとすることはできない。なぜならそれら偈頌經典の成立は古いとしても、それらが必ずしも釈尊在世の最初期の有り様のみを物語るものでないことは、經典の中には釈尊滅後の事柄なども含まれているからである。

第2には、そのような偈頌經典には同時に、遍歴修行を否定するような言葉や、サンガとともに僧院に住する修行者が存在したことをも記されており、むしろこの方が大勢を占め、しかもそれを讃える文章も存在するということである。

このことから、偈頌經典においても、釈尊は仏教の修行者たる者はすべからず遍歴しなければならないとは考えておられなかった、ということが示されているといえるであろう。確かに散文聖典がいうように、少欲知足を実践するためにはもし欲すれば遍歴修行も行われてよいが、しかし一方では遍歴修行にはじつくりと禅定修行ができないという欠陥もあるのであって、したがってサンガとともに僧院の中に住みながら、よき友と切磋琢磨して互いの向上をめざし、できるだけ静かな場所で、ただ一人での禅定を行えというのが、偈頌經典の全体的なトーンであるといつてよいであろう。

しかしながら、遍歴はともかくとして、その全体の空気としては、偈頌經典には頭陀行的な色彩が強いことは否定できないであろう。また偈頌經典のいうところからも、釈尊在世中の初期の時代から後期の時代に至ると、頭陀行者と呼ばれるような修行者がだんだん少なくなって、安易な生活で満足する傾向となってきたということは推測される。しかしながら厳格な頭陀行を主張した提婆達多の破僧事件は釈尊の晩年のことであり⁽¹⁾、釈尊が入滅されるまで摩訶迦葉は頭陀行を行っていたということも忘れてはならない。

(1) 「モノグラフ」第11号に掲載した【論文11】「提婆達多(Devadatta)の研究」を参照されたい。

[3-2] また釈尊時代の仏教の修行者の本来のあり方なり実態なりを偈頌經典にのみ求めるという傾向も反省されるべきであろう。

散文で書かれた聖典の大きな柱の1つには「律蔵」があって、これは現実の社会や出家修行者の実態を土台とし、さまざまな問題が生じたときには、これを現実的に処理するという立場で編集されている。要するにサンガが安定的に存続し発展することを目的として作られたものである。そしてもう1つは「経蔵」であって、これは出家修行者の端的に言えば悟りという、究極的な目標を追求したものであって、理念的・内面的な側面が強いということができよう。要するに一人一人の出家修行者がいかに生きるべきかということに関する教えを集めたものである。

言葉を換えていえば「律蔵」は法律文書としての「律」を集めたものであり、「経蔵」は人生訓としての「戒」を集めたものといえることができる。そして「経蔵」の中の偈頌經典は、この傾向がもっとも典型的に現れたものといえることができる。

したがってこのような傾向にある偈頌經典が頭陀行的なものを強調するのは、「望まれる修行者像」としてであって、必ずしも「現実の修行者像」を反映しているものではないといわなければならない。

[3-3] ところで宿題となっていたのは、ジャイナ教聖典やバラモン教聖典がいう修行者のあり方と、原始仏教聖典が描き出すそれらの修行者のあり方に大きな落差があるのはなぜかということであった。もちろんその1つは、外部から批判的に見るものと、内部から護教的に見る立場の違いであろうが、実は上記のようなことも反映しているのではないかと考えられる。すなわち、ジャイナ教の修行者やバラモン教の遍歴者の遍歴のあり方を調査した材料であるジャイナ教聖典やヒンドゥー教聖典も実は偈頌で書かれたものであって、それは「望まれる修行者像」であるが、原始仏教聖典が伝えるそれらの修行者像は「現実の修行者像」であったのではないかとということである。原始仏教聖典が伝えるものがあながち荒唐無稽なものでないことは、ジャイナ教聖典自身のいうその教えと、原始仏教聖典が伝えるニガンタ派の教えは、まさしくぴったりと重なるほど一致することが雄弁に物語っている。

また「律藏」はパーリ律やその他の漢訳律が5つもありながら、基本的なところではその間に齟齬がないのは、法律に相反する規定や矛盾があっては法律の役割を果たすことができないからであるが、ジャイナ聖典や婆羅門の法典類の中には、それ自身の中にさまざまな説があって、1つの統一したイメージを形成することが難しいのは、さまざまな時代にさまざまな経過で成立した種々雑多な文献を含んでいると同時に、それは法律文書ではなく、望ましい修行者像が書かれているのであるから、必ずしも首尾一貫していなければならないということはないからであろう。

[4] もっとも通説のいう最初期の仏教の修行者は遍歴を行っていたという「最初期」は釈尊在世中をさし、したがって「後期」は釈尊滅後を意味させている場合があるかも知れない。しかしながらもしそうだとすれば、現在まで伝えられている原始仏教聖典の伝えるところ、あるいは少なくとも散文の聖典の伝えるところは、すべて釈尊滅後の有り様を記したものであるということになる。

しかしもしそうとするなら、後に論じる仏教の基本思想である「中道」説や、「三宝帰依」というすべての仏教の出家者を「釈尊のサンガ」に収斂する理念や、各地に存在した組織的な「仏弟子たちを上首とするサンガ」の形成やその運営方法、本論では取り扱わないが釈尊の中心教説とされる四諦という教えなどは、すべて釈尊ご自身の業績ではなく、釈尊滅後の弟子たちの功績ということになってしまう。要するに釈尊の教えは偈頌經典の中に散在する断片的なもの、あるいは素材のみであって、体系化したのは後世の仏弟子たちの功績であったとするならば、今私たちが考えている仏教は、ほとんどが「仏」の教えではなく、したがって「仏教」ではなくなるといわなければならない。

しかしもし今ここに上げた主に散文聖典に説かれる世界観や教えが、釈尊自身の菩提樹下の悟りの中に内包されていたものであったとするならば、やはりそれらは「遍歴」とは相反するものであるから、「遍歴」は釈尊の中心的な教えとしては採用しなかったものといわなければならない。しかしこの基本的な世界観や教えについては第9節において改めて考えることにしたい。

[5] 以上仏教の修行者の遍歴について、原始仏教聖典や偈頌經典の記述をもとに調査してきた。その結論は、仏教においては釈尊自身もその弟子たちも定住が主な生活形態であっ

て、その間に「遊行」は行ったが、「遍歴」は行いたいものが行えばよいという扱いのものであったということである。したがって、釈尊在世の最初期においては遍歴していた修行者たちが、僧院が建設されるようになって、定住の集団生活が始められ、それによってサンガも形成されたという、その前提は成り立たないということになる。

また視点を変えれば、そのような通説によれば、僧院の建設も、サンガの形成も外的要因によって自然偶発的に起こったということになるであろうが、筆者は僧院の建設もサンガの形成も、釈尊の基本的な世界観・価値観の中から意図的になされたものであったと考えるので、次にこれを論じたいと思う。